

一、次の文章をよく読んで、本紙一、の問いに答えなさい。

われわれは風景や花にふれて美しいと感じる。音楽を聞いたり、絵や彫刻を見たりしても美しさを感じる。自然のものであれ、人間の手の加わったものであれ、われわれはごく自然に美しいという感情を抱く。

同時に人間はみずから美しさを求め、つくりだそうとする。絵を描いたり、彫刻を彫ったりするだけではなく、着るものを選んだり、花を飾ったりというふうに、美しいものをすすんで生活にとりいれようとする。

人間はいつごろから美しさを意識するようになったのだろうか。

南アフリカの洞窟からは、幾何学もようの刻まれた七万五千年前の赤鉄鋼のかたまりが見つかっている。同じ洞窟からは、首飾りとして使われたらしい穴のあいたまきが、の殻も見つかっている。そんな大昔から、人間には、生きるうえで、美しさというものを求めずにはいられない本能的な衝動がそなわっていた。

ところで、なにを美しいと感じるかは、民族や地域や文化によっても、ずいぶんちがう。

ばくは一九九〇年代に八年ほどエジプトのカイロでくらしたことがある。くらしはじめるにあたって、アパートをさがしたり、生活に必要なにちようひんをそろえたりした。そのたびに違和感をおぼえたのは、エジプトと日本の美的センスのちがいであった。

たとえば、アパートのないうそう――。

外国人が借りるのは、ほとんどが家具付きのアパートだ。しかし、せっかく間取りや場所が気に入っても、置いてある家具になかなかなじめない。ヴェルサイユ宮殿からもってきたかのような猫足のテーブル、パーティー会場のようなシャンデリア、金色に塗られた派手な枠付きの鏡、ピンクに金の花柄をあしらったベッドなど、異様なゴージャス感にあふれているのだ。

でんかせいひんもそうだった。扇風機を買いに電気屋に行くと、店に並んでいる扇風機の羽の大半が金色である。ただでさえ暑いのに、金色の羽で送られてくる風なんて、いっそう暑苦しそうである。

妻が靴を買いに行っても、シンプルな黒のパンプスがない。金色のラインが何本も入っていたり、金びかのチョウチョの飾りがくっついていたりする。それがなければいいのと彼女はいうのだが、エジプトの人にとっては、この金びかの飾りこそがチャームポイントなのである。

(A)、シックなもの、シンプルなものというのは、ここでは趣味のよいものとは見なされない。金づくしプラス、ヴェルサイユ宮殿風のロココ趣味、それがエジプトでは美の条件と見られていたのだ。さすが、ツタンカーメンの黄金のマスクの国だけある。国や文化が変われば、美的感覚は大きく異なるものだあと感心したものだ。

(B)、それから三、四年ほどたったころだ。店で見かけるでんかせいひんや家具などの趣味が、明らかに変わってきたことに気づいた。

(C)、数年前にはなかなか見つからなかった黒いシンプルな靴が目につくようになった。扇風機の羽も金色から、涼しげな色のものが増えてきた。女性たちの化粧も変化した。以前はエジプトで口紅といえば、たいしてシヨッキングピンクが派手な赤だったのが、シックなブラウン系の口紅をつけた女性を見かけるようになった。それでも日本と比べれば十分、派手でゴージャスなのだが、以前と比べると違和感は明らかに減った。

6
いえることはふたつある。一つは、さっきもいったように、なにを美しいと感じるかは文化や地域によって、さまざまだということ。もう一つは、その感覚は絶対的なものではなくて、時代とともに、あるいは何かのきっかけがあれば「変わる」ということだ。

ただ、気になることもある。それはエジプトでも感じたように、美意識のちがいによる違和感が、世界的にだんだん薄れてきていることだ。

エジプトにいながら、シンプルな黒い靴や、涼しげな柄の扇風機が手に入るのは、そこで生活していたばかりにとっては歓迎すべきことだった。けれども、それは逆にいえば、金色の扇風機の羽を美しいと感じる感覚がエジプトから失われることを意味する。日本人からすれば、「金色の羽は、ちよっと……」というのは平均的な感じ方だろう。しかし、エジプト人も、あるいはほかの国の人たちも、同じように「金色の羽は、ちよっと……」

一、次の文章をよく読んで、本紙一、の問に答えなさい。

今からおよそ九百年前、白河院という非常に大きな力を持った方がいた。彼は天皇として十四年間政務を執り、退位して院^{注1}となってからも堀河、鳥羽、崇徳といった三代の天皇の上に立ち、四十三年にわたって政治を行った。

白河院は心根がしっかりとしており、やさしさもあわせ持った人物で、すぐれた知徳を備え、政治上のささいな問題でもげんか^aに対応したので、人々はその治世をほめたてていた。

白河院に仕える人々の中に藤原頼季^{注2}という男がいた。頼季は白河院の乳母の子でも、高い役職には就けなかったものの、讃岐、丹波、尾張、伊予、播磨、美作といった国々の国司を務め、白河院の信頼も厚く、重要な政務を行う際には特に意見を求められるなど、有力な人物であった。

頼季は全国の様々な所に領地を持っていた。これらの領地はすべて公的に認められたもので、頼季はその土地の権利^bを行使した文書をきちんと保管していた。しかし、その中の一つ、東北にあった領地を源義光^{注3}という武士が突然、自分のものであると主張しだした。頼季は義光が勝手に自分の領地を横取りしようとしていると思ったが、義光は自分の領地だと言い張るので、決着がつかなかった。頼季は義光の勝手な言い分に対し、大きな怒りを覚えたが、相手は荒くれ者として名の通っている義光であったので、(A)平和的に解決しようと考えた。そこで白河院に、問題となっている土地がどちらのものであるのか決めてもらおう、と訴え出た。頼季は当然のことながら、自分が正しいと思っていたので、すぐに白河院がこの土地は頼季のものであると、(B)言ってくれださることを確信していた。しかし、頼季の予想に反して白河院はこの問題に対し、(C)判断を下さなかったのである。頼季は、明らかにどちらが正しいかわかっているはずなのに、なぜ白河院は何も言ってくださらないのか、といらだちがつのり、おそれ多いことだとは思いつつも、白河院を恨まずにはいられなかった。

あるとき、頼季が白河院の御所にさんじようしたとき、偶然にも頼季と白河院の二人だけが部屋にいたということがあった。白河院は頼季を近くに呼び寄せて、「お前が訴えている東北の領地について今まで判断を下さずにいたことを、さぞやむねに思っているだろう」と言った。頼季は返答もせず、白河院のことばにかしこまってひかえていると、たびたび同じことを言われるので、(D)自分の気持ちを白河院に語り始めた。「争いになったときには、誰もが自分が正しいと主張するので、それぞれの主張をよく聞かなければならないことはわたしも承知しております。しかし、今回の件ではどちらが正しいのかははっきりしているはずですよ。今までご判断くださらなかったのが残念にございます」と頼季が話すと、白河院は「確かにお前の言うとおりだ。しかし、わたしはあの東北の領地は義光にゆずってやればよいと思うのだ」と答えた。思いもよらぬ白河院のことばに頼季はおどろき、何を仰せになるのかとその真意をはかりかねた。何も言うことができないまま、ひかえていると、白河院はことばを続けた。「お前にはあの領地がなくなつたとして大きないたではならぬだろう。治める国もあり、また全国の各地に領地も持っている。そして、官職もある。しかし、義光はあの土地に命をかけるまで言っているのだ。だからゆずれ、と言っているわけではない。あくまでもお前を大事に思っているからなのだ。義光は『あ』であり、慈悲の心なぞ持ち合わせていないのひょうばんである。その義光がお前に対して何らかの行動に出るようなことになればどうするのだ。夜、道を歩いているときに義光やその家来がお前にきがい^gを加えてくるのではないだろうか。そのようなことになれば、名譽^hまできずつけられてしまう。確かにお前の言うとおり、道理で判断することもできた。また、お前をかわいく思い、義光をにくらしく思うという気持ちからいっても、すぐに判断できたことだ。しかし、先ほど言ったようにお前のことを考えると今まで判断を下せずにいたのだ」と言った。頼季は白河院の心遣いに感激し、涙を流して御所から退出した。

頼季は帰るとすぐに、義光を自分の屋敷に呼び出した。領地争いをしてる相手からの突然の呼び出しであったので、義光は何の話だろうと思いつながら、頼季の屋敷にやってきた。頼季はすぐに義光と対面した。そして、「あの東北の領地のことでお話をしたく、お越し願ったのです。この件ではわたしは正しいということは先日もし申し上げましたが、(E)考えてみるとあの土地がなくなつてもわたしには大きな問題とはなりません。しかし、あなたはあの土地に『い』をかけるまでおっしゃるぐらいですから、絶対に必要なのでしょうか。お話を思い返すとあなたが何ともきどくに思えてならないのです。ですから、あの土地はあなたにおゆずります」と言って、領地を義光にゆずると書いた文書をわたした。義光は非常に喜んで、かしこまりつつ、その文書を受け取った。そして、義光は頼季の家来たちが集まる所に行つて、紙に「義光」と書き、それをていしゅう^jして帰った。自分の名を書き、ていしゅうするのは臣従の誓いである。義光は頼季の計らいに感謝し、その家臣となったのである。

そのうち、頼季が外出をするとき、不思議なことに鎧を着た武者五、六人が付き従った。またあるとき、供をつれずに白河院の御所から帰ろうとすると、あの武者たちがすつと現れたのである。頼季ははじめは誰かわからず、不安に思ったが、あるとき「お前たちは何者なのだ」と問うてみると、「義光様に仕える者でございます」と答えた。武者たちは頼季がどこへ行くにもそのそばをはなれることはなかった。こうして考えてみると、もし義光が自分に対して悪意を持って何かをしただろうと、頼季の胸におそろしさがかみあげてきた。頼季は改めて白河院のありがたき心遣いに感謝しつつ、その深い考えを思い知った。そして、「よくぞあの領地を手放したものだ」と自分でも思った。

頼季は領地は失つたものの、それに代わる大きなものを手に入れたのである。

(『十訓抄』『古事談』より)

注1 院……退位した天皇のこと。特にこの時代は院のほうが天皇よりも実権を持っていた。

注2 乳母……当時、身分の高い人の子に、生母に代わって乳を飲ませ、育てた女性。

注3 国司……朝廷から置かれた地方の長官。

二、例のように、()に気象や天象に関することばを入れて文を完成させなさい(答は本紙に書くこと。平仮名で答えてもよい)。

例 あの人とはとても優秀で、ぼくと比べるとまるで()月()とすっぱんだよ。

①転校したあの子ども元気で過ごしていると()の便りに聞いた。 ②彼の話は()をつかむような話で現実味が無い。

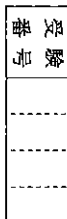
③自習中にさわいでいたので先生の()が落ちた。 ④その程度の能力の者なら()の数ほどいる。

⑤この絵は多くの作品の中でも()を放っている。 ⑥そんなことなど()ほとんど知らない。

⑦無名だった彼の作品もようやく()の目を見ることがとなった。

三、次の()部を漢字に直しなさい(答は本紙に書くこと)。

- ① ア 歌舞伎のやく者。 イ 本のやく者。 ② ア 学校で補しゅう授業がある。 イ 学校の補しゅう工事がある。 ③ ア 友と会う機がいを作る。 イ 工場に機がいを導入する。



一、別紙一、の文章をよく読んで、次の問いに答えなさい。

① a、jの部分を読み直さない(送り仮名が必要なものはそれも書くこと)。

a () (b) (c) (d) (e) ()

f () (g) (h) (i) (j) ()

② (A) (E)に入る最も適切なことばを次の中から選んで、記号を書きなさい(同じ記号は二度以上使いません)。

ア なかなか イ よくよく ウ あくまでも エ はつきりと オ ばつりばつりと

A () B () C () D () E ()

③ あ () い ()に入る最も適切なことばを文中からぬき出して□の字数で書きなさい。

あ () い ()

④ 1.「この問題」とは何ですか。文中のことばをぬき出して□の字数で書きなさい。

頭季と義光の

⑤ 2.なぜ「白河院を恨まずにはいらなかった」のですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

⑥ 3.なぜ頭季は自分が正しいとはつきり言えるのですか。その理由をできるだけ文中のことばを使って答えなさい。

⑦ 4.白河院が領地をゆるするよう頭季に言った「真意」は何ですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

⑧ 5.なぜ頭季にとっては「大きな問題」とならないのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

⑨ 6.この敬語と同じ意味、同じ使われ方をしている敬語を文中からぬき出して□の字数で書きなさい。

⑩ 7.これは具体的にどのようなことを指していますか。

⑪ 8.義光が「何かをしたら」とありますが、義光がどういうことをしたであろうと考えられますか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

⑫ 9.頭季が手に入れた「大きなもの」とは何ですか。

⑬ ① ア () イ () ② ア () イ () ③ ア () イ ()

⑭ ① () ② () ③ () ④ ()

⑮ () ⑥ () ⑦ ()

⑯ ()

⑰ ()

⑱ ()

⑲ ()

⑳ ()

㉑ ()

㉒ ()

㉓ ()

㉔ ()

㉕ ()

㉖ ()

㉗ ()

㉘ ()

一、次の文章をよく読んで、本紙一、の問いに答えなさい。

昔の中国に郭景純という人がいた。姓は「郭」であるが、「景純」というのははるくだ(駱駝)のことだ。もちろん本名ではない。しかし、本当の名はもとや誰にも知らない。彼は不幸にして背骨が曲がる病気をわずらい、それ以来、腰を曲げ、背中を山なりにして、うつむき加減に歩くようになった。その様がらくだに似ているというので、村の人たちが「駱(駱駝のこと)」と呼んだのだ。ところが、これを聞いて彼はうらみに思ったり傷ついたりするどころか、かえって「(A)結構ではないか。私を呼ぶにはまことにふさわしい名だ」と言いつつ、それ以後、本名を捨て、自ら「景純」と名乗るようになった。駱の住んでいた村は豊樂郷といい、長安の都の西にあった。駱は植木職人であった。庭をつくりそれを楽しむ長安の富豪や、果物農家は皆、争うように彼を呼び寄せて木々の世話させた。駱の植えたり、移植した木で、りっぱに根付き、大きく成長し、葉を茂らせ、(B)実を結ばせないものはなかった。しかし、彼以外の植木職人が、そのやり方をひそかにまねても、これにおよぶことはなかった。

「どうしたら、そのように上手に木を育てることができるのですか。」とある人が問うた。駱はこう答えた。

「私には木の寿命をのばしたり、葉を茂らせたりすることはできません。私にできるのは、木がそれぞれに持っている性質に従って、その本性を十分にのばしてやることだけなのです。(C)、植えられた木というのは、その根を(D)地中にのばそうと願ひ、根元への土の寄せ加減にはかたよりがないことを願ひ、移植されても植えられる土は元の場所の土であることを願ひ、根元の土にはすき間がないことを願ひ、移すとき、そのようにして植え終えたら、もう動かしてはなりません。また余計な心配をしてもいけません。そこから立ち去った後は、二度と気にかけないことです。木を植えるときは、わが子のようにし、その後はまったく捨ててしまおうようにしておけば、木の天性は完全に保たれ、その木の本来の性質が、満たされはつきされるのです。ですから、私がしていることは、木の生長をさまたげないことだけです。木を生長させ、葉を茂らせる力が、私にあるのではなく、木が自ら実をつけるのをじやましたり、実をつける力をそいだりしないだけです。決して、早く実がつくようにしたり、多くの実りを得させる力が、私にあるわけではありません。しかし、私以外の植木職人はそうではないようです。木の根が曲がって拳のように固まったまま植えてしましますし、土は新しいものに(E)入れかえたりしてしまします。木の根元に土を寄せるにしても、度をこえて多すぎたり、反対に少なすぎたりします。もし仮に、このようなまちがったやり方でなく、正しい植え方をしていたとしても、木を大切にすることにしておいて、あまりにもいづかし過ぎますし、木を心配することにおいては、熱心に過ぎるのです。毎朝、木を見て、毎夕、木をなでます。そして、そばをはなれた後もこれをふり返って見ます。さらに、ひどいものになると、木のはだに手を立てることによって、生きていくか枯れているかを確かめたり、根元をゆり動かすことによって、根元の土が(F)つまっているか、すき間があるかを調べたりします。そうすることによって、木の本来の性質が、日々、元の姿からはなれていってしまうのです。そのような人たちは、自分自身は木を大切にしている、と言うのですが、実のところ、害を与えているだけなのです。木を心配しているとは言いますが、実のところ、木にとってはあだとなっているのです。ですから、私にはおよばないのです。実際、私たちは、木に対して何ができるというのでしょうか。何もできません。」

そこで先ほど駱に問うた人が言った。

「あなたの木に対する姿勢を、そのまま国の政治に当てはめたらどうなるのでしょうか。」

駱は答えた。

「私は木のことについて知っているだけです。政治は私のつとめではありません。けれども、私の村で人々の上に立つ役人を見てみると、どうも好んで、法律を(G)ややこしくしているようです。役人は、人々のことを大切に思い、いづかしんでいるのであって、決して苦しめようなどとは思っていないのでしようが、結局、いらぬことをして、人々に災いをもたらしているだけです。朝夕に役人がやって来て大声できんて言います。『われわれ役人にお上からの命令があつた。農民たちのために田畑をたがやすうながし、作物を植えるのをはげまし、その収穫を見とどけよ、と。自分自身の生活のために、早く糸をつむぎ、布をおれ。お前たちの幼な子をしっかりと養育せよ。お前たちのにわとりや豚をこゝろ太らせよ』と。役人は、たいこを打ち鳴らし、拍子木を打って村人たちの心を集めます。私たちが下々のものは、そのたびに食事もちゅうだんして、役人たちをもてなさなければならぬが、本当はそんな余裕はないのです。だから、病気になる、あるいは仕事をすることが起らない、なつたりするのです。これでは、どのようにして、自分たちの生活を豊かにし、自分たちの望むような安楽な生活をしようとするのですか。このように考えてみると、私の仕事と政治とは、あるいは似ているところがあるのかもしれない。」

これを聞いて、駱に問うた人は我が意を得たりと、喜んで言った。

「あなたの話は何とすばらしいことでしょう。私は、いつも今の役人のやり方はどこかおかしいと思つていましたが、今、木を育てることについて質問しながら、人々の生活を成り立たせる方法を教えてもらいました。このことを書き伝え、役人たちのいましめとしようではありませんか。」

二、次の文章をよく読んで、本紙二、の問いに答えなさい。

書店に足を運んで、日々、洪水のように押し寄せる新刊本の波に茫然とする経験は、誰にでもあるだろう。今なら、アマゾンの広告メールなどでも、新刊情報は絶えず手もとに届けられている。一体、何を読んで、何を読まなくていいのかわからない。選択の可能性が増えたといっても、手に負える限度というものがあがる。結果、評判になつていなくてもベストセラー本でも読んでみるか、というようなことになる。

私たちは、数十年前に比べて、はるかにように、はるかに多くの本を手に入れるようになった。しかし、そのおかげで、私たちはかつての人間よりも知的な生活を送つていけるということができるだろうか？ どうも、そうでもなさそうである。

なぜだろうか？

グーテンベルクによって活版印刷技術が発明されるまで、書物は当然、手書きであり、それだけに貴重品で、そもそも一般にはほとんど流通していなかった。(A)、当時の人たちは、その少ない情報だけを手がかりにしながら、今日にも通じるような深い思索を行つていく。カントやヘーゲルが生徒に与えた本の冊数が、今から考えれば意外なほど少なかったからといって、彼らを無知で愚かな人間だと言ふ人はいないだろう。

本に限らず、(B)、音楽の世界でも同じことが言える。ジャズ・ミュージシャンのマイルス・デイヴィスは、子供の頃にはレコードを三枚くらいしか持っていなかったらしい。音楽は、生演奏か、ラジオで聴くしかなかったわけだが、それを言うなら、二〇世紀以前のクラシックの音楽家たちは、バッハでも、モーツァルトでも、彼らが生涯に聴くことができた曲の数というものは、ごくごく限られたものであったはずだ。今のクラシック・マニアの何十分の一、何百分の一程度だったかもしれない。

(C)、現代はどうだろうか？ 身近な友人が、プロのミュージシャンになりたいと言ひ出したとする。その彼が、「だけれどCDは三枚しか持っていないませんか」と言つたとき、誰でも、「おまえ、ちよつとアタマひやせ」と言ひたいくなるだろう。私たちは、ともかくも、手に入る情報を一通り揃えておかなければ、何もできないというように世界に生きていく。しかし、そうした時代の文学や音楽が、その分、質的に豊かになつたかといへば、誰もが答えに戸惑うだろう。

かつての人間たちは、要するにみんな、スロー・リーダであり、スロー・リスナーだったのである。

個人的な経験からしても、中学や高校時代には、そもそもお金の余裕がなかったから、月の初めに小遣いをもらつて、欲しかった本とCDを買えば、財布はすぐにスカスカになつて、あとは翌月まで、ひたすら同じ本を読み、同じCDばかりを聴いていた。しかし、そうした頃に出会つた小説や音楽は、細部まで今でもはつきりと覚えていて、自分に非常に大きな影響を与えたものとして特別な思い出を感ぜられる。

(D)、大人になつて一度に二〇枚ものCDを買ひ、スキップしながらざつと聴き飛ばしてしまつたようなアルバムや、必要に迫られて、つい速読してしまつたような本の中には、ほとんどマトモに内容も覚えていないようなものもある。これは無意味であるという以上、³ ⁴ ⁵ ⁶ ⁷ ⁸ ⁹ ¹⁰ ¹¹ ¹² ¹³ ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁰ ²¹ ²² ²³ ²⁴ ²⁵ ²⁶ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ³² ³³ ³⁴ ³⁵ ³⁶ ³⁷ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ ⁴² ⁴³ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁴⁸ ⁴⁹ ⁵⁰ ⁵¹ ⁵² ⁵³ ⁵⁴ ⁵⁵ ⁵⁶ ⁵⁷ ⁵⁸ ⁵⁹ ⁶⁰ ⁶¹ ⁶² ⁶³ ⁶⁴ ⁶⁵ ⁶⁶ ⁶⁷ ⁶⁸ ⁶⁹ ⁷⁰ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁷⁹ ⁸⁰ ⁸¹ ⁸² ⁸³ ⁸⁴ ⁸⁵ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ ⁹⁶ ⁹⁷ ⁹⁸ ⁹⁹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁴ ¹⁰⁵ ¹⁰⁶ ¹⁰⁷ ¹⁰⁸ ¹⁰⁹ ¹¹⁰ ¹¹¹ ¹¹² ¹¹³ ¹¹⁴ ¹¹⁵ ¹¹⁶ ¹¹⁷ ¹¹⁸ ¹¹⁹ ¹²⁰ ¹²¹ ¹²² ¹²³ ¹²⁴ ¹²⁵ ¹²⁶ ¹²⁷ ¹²⁸ ¹²⁹ ¹³⁰ ¹³¹ ¹³² ¹³³ ¹³⁴ ¹³⁵ ¹³⁶ ¹³⁷ ¹³⁸ ¹³⁹ ¹⁴⁰ ¹⁴¹ ¹⁴² ¹⁴³ ¹⁴⁴ ¹⁴⁵ ¹⁴⁶ ¹⁴⁷ ¹⁴⁸ ¹⁴⁹ ¹⁵⁰ ¹⁵¹ ¹⁵² ¹⁵³ ¹⁵⁴ ¹⁵⁵ ¹⁵⁶ ¹⁵⁷ ¹⁵⁸ ¹⁵⁹ ¹⁶⁰ ¹⁶¹ ¹⁶² ¹⁶³ ¹⁶⁴ ¹⁶⁵ ¹⁶⁶ ¹⁶⁷ ¹⁶⁸ ¹⁶⁹ ¹⁷⁰ ¹⁷¹ ¹⁷² ¹⁷³ ¹⁷⁴ ¹⁷⁵ ¹⁷⁶ ¹⁷⁷ ¹⁷⁸ ¹⁷⁹ ¹⁸⁰ ¹⁸¹ ¹⁸² ¹⁸³ ¹⁸⁴ ¹⁸⁵ ¹⁸⁶ ¹⁸⁷ ¹⁸⁸ ¹⁸⁹ ¹⁹⁰ ¹⁹¹ ¹⁹² ¹⁹³ ¹⁹⁴ ¹⁹⁵ ¹⁹⁶ ¹⁹⁷ ¹⁹⁸ ¹⁹⁹ ²⁰⁰ ²⁰¹ ²⁰² ²⁰³ ²⁰⁴ ²⁰⁵ ²⁰⁶ ²⁰⁷ ²⁰⁸ ²⁰⁹ ²¹⁰ ²¹¹ ²¹² ²¹³ ²¹⁴ ²¹⁵ ²¹⁶ ²¹⁷ ²¹⁸ ²¹⁹ ²²⁰ ²²¹ ²²² ²²³ ²²⁴ ²²⁵ ²²⁶ ²²⁷ ²²⁸ ²²⁹ ²³⁰ ²³¹ ²³² ²³³ ²³⁴ ²³⁵ ²³⁶ ²³⁷ ²³⁸ ²³⁹ ²⁴⁰ ²⁴¹ ²⁴² ²⁴³ ²⁴⁴ ²⁴⁵ ²⁴⁶ ²⁴⁷ ²⁴⁸ ²⁴⁹ ²⁵⁰ ²⁵¹ ²⁵² ²⁵³ ²⁵⁴ ²⁵⁵ ²⁵⁶ ²⁵⁷ ²⁵⁸ ²⁵⁹ ²⁶⁰ ²⁶¹ ²⁶² ²⁶³ ²⁶⁴ ²⁶⁵ ²⁶⁶ ²⁶⁷ ²⁶⁸ ²⁶⁹ ²⁷⁰ ²⁷¹ ²⁷² ²⁷³ ²⁷⁴ ²⁷⁵ ²⁷⁶ ²⁷⁷ ²⁷⁸ ²⁷⁹ ²⁸⁰ ²⁸¹ ²⁸² ²⁸³ ²⁸⁴ ²⁸⁵ ²⁸⁶ ²⁸⁷ ²⁸⁸ ²⁸⁹ ²⁹⁰ ²⁹¹ ²⁹² ²⁹³ ²⁹⁴ ²⁹⁵ ²⁹⁶ ²⁹⁷ ²⁹⁸ ²⁹⁹ ³⁰⁰ ³⁰¹ ³⁰² ³⁰³ ³⁰⁴ ³⁰⁵ ³⁰⁶ ³⁰⁷ ³⁰⁸ ³⁰⁹ ³¹⁰ ³¹¹ ³¹² ³¹³ ³¹⁴ ³¹⁵ ³¹⁶ ³¹⁷ ³¹⁸ ³¹⁹ ³²⁰ ³²¹ ³²² ³²³ ³²⁴ ³²⁵ ³²⁶ ³²⁷ ³²⁸ ³²⁹ ³³⁰ ³³¹ ³³² ³³³ ³³⁴ ³³⁵ ³³⁶ ³³⁷ ³³⁸ ³³⁹ ³⁴⁰ ³⁴¹ ³⁴² ³⁴³ ³⁴⁴ ³⁴⁵ ³⁴⁶ ³⁴⁷ ³⁴⁸ ³⁴⁹ ³⁵⁰ ³⁵¹ ³⁵² ³⁵³ ³⁵⁴ ³⁵⁵ ³⁵⁶ ³⁵⁷ ³⁵⁸ ³⁵⁹ ³⁶⁰ ³⁶¹ ³⁶² ³⁶³ ³⁶⁴ ³⁶⁵ ³⁶⁶ ³⁶⁷ ³⁶⁸ ³⁶⁹ ³⁷⁰ ³⁷¹ ³⁷² ³⁷³ ³⁷⁴ ³⁷⁵ ³⁷⁶ ³⁷⁷ ³⁷⁸ ³⁷⁹ ³⁸⁰ ³⁸¹ ³⁸² ³⁸³ ³⁸⁴ ³⁸⁵ ³⁸⁶ ³⁸⁷ ³⁸⁸ ³⁸⁹ ³⁹⁰ ³⁹¹ ³⁹² ³⁹³ ³⁹⁴ ³⁹⁵ ³⁹⁶ ³⁹⁷ ³⁹⁸ ³⁹⁹ ⁴⁰⁰ ⁴⁰¹ ⁴⁰² ⁴⁰³ ⁴⁰⁴ ⁴⁰⁵ ⁴⁰⁶ ⁴⁰⁷ ⁴⁰⁸ ⁴⁰⁹ ⁴¹⁰ ⁴¹¹ ⁴¹² ⁴¹³ ⁴¹⁴ ⁴¹⁵ ⁴¹⁶ ⁴¹⁷ ⁴¹⁸ ⁴¹⁹ ⁴²⁰ ⁴²¹ ⁴²² ⁴²³ ⁴²⁴ ⁴²⁵ ⁴²⁶ ⁴²⁷ ⁴²⁸ ⁴²⁹ ⁴³⁰ ⁴³¹ ⁴³² ⁴³³ ⁴³⁴ ⁴³⁵ ⁴³⁶ ⁴³⁷ ⁴³⁸ ⁴³⁹ ⁴⁴⁰ ⁴⁴¹ ⁴⁴² ⁴⁴³ ⁴⁴⁴ ⁴⁴⁵ ⁴⁴⁶ ⁴⁴⁷ ⁴⁴⁸ ⁴⁴⁹ ⁴⁵⁰ ⁴⁵¹ ⁴⁵² ⁴⁵³ ⁴⁵⁴ ⁴⁵⁵ ⁴⁵⁶ ⁴⁵⁷ ⁴⁵⁸ ⁴⁵⁹ ⁴⁶⁰ ⁴⁶¹ ⁴⁶² ⁴⁶³ ⁴⁶⁴ ⁴⁶⁵ ⁴⁶⁶ ⁴⁶⁷ ⁴⁶⁸ ⁴⁶⁹ ⁴⁷⁰ ⁴⁷¹ ⁴⁷² ⁴⁷³ ⁴⁷⁴ ⁴⁷⁵ ⁴⁷⁶ ⁴⁷⁷ ⁴⁷⁸ ⁴⁷⁹ ⁴⁸⁰ ⁴⁸¹ ⁴⁸² ⁴⁸³ ⁴⁸⁴ ⁴⁸⁵ ⁴⁸⁶ ⁴⁸⁷ ⁴⁸⁸ ⁴⁸⁹ ⁴⁹⁰ ⁴⁹¹ ⁴⁹² ⁴⁹³ ⁴⁹⁴ ⁴⁹⁵ ⁴⁹⁶ ⁴⁹⁷ ⁴⁹⁸ ⁴⁹⁹ ⁵⁰⁰ ⁵⁰¹ ⁵⁰² ⁵⁰³ ⁵⁰⁴ ⁵⁰⁵ ⁵⁰⁶ ⁵⁰⁷ ⁵⁰⁸ ⁵⁰⁹ ⁵¹⁰ ⁵¹¹ ⁵¹² ⁵¹³ ⁵¹⁴ ⁵¹⁵ ⁵¹⁶ ⁵¹⁷ ⁵¹⁸ ⁵¹⁹ ⁵²⁰ ⁵²¹ ⁵²² ⁵²³ ⁵²⁴ ⁵²⁵ ⁵²⁶ ⁵²⁷ ⁵²⁸ ⁵²⁹ ⁵³⁰ ⁵³¹ ⁵³² ⁵³³ ⁵³⁴ ⁵³⁵ ⁵³⁶ ⁵³⁷ ⁵³⁸ ⁵³⁹ ⁵⁴⁰ ⁵⁴¹ ⁵⁴² ⁵⁴³ ⁵⁴⁴ ⁵⁴⁵ ⁵⁴⁶ ⁵⁴⁷ ⁵⁴⁸ ⁵⁴⁹ ⁵⁵⁰ ⁵⁵¹ ⁵⁵² ⁵⁵³ ⁵⁵⁴ ⁵⁵⁵ ⁵⁵⁶ ⁵⁵⁷ ⁵⁵⁸ ⁵⁵⁹ ⁵⁶⁰ ⁵⁶¹ ⁵⁶² ⁵⁶³ ⁵⁶⁴ ⁵⁶⁵ ⁵⁶⁶ ⁵⁶⁷ ⁵⁶⁸ ⁵⁶⁹ ⁵⁷⁰ ⁵⁷¹ ⁵⁷² ⁵⁷³ ⁵⁷⁴ ⁵⁷⁵ ⁵⁷⁶ ⁵⁷⁷ ⁵⁷⁸ ⁵⁷⁹ ⁵⁸⁰ ⁵⁸¹ ⁵⁸² ⁵⁸³ ⁵⁸⁴ ⁵⁸⁵ ⁵⁸⁶ ⁵⁸⁷ ⁵⁸⁸ ⁵⁸⁹ ⁵⁹⁰ ⁵⁹¹ ⁵⁹² ⁵⁹³ ⁵⁹⁴ ⁵⁹⁵ ⁵⁹⁶ ⁵⁹⁷ ⁵⁹⁸ ⁵⁹⁹ ⁶⁰⁰ ⁶⁰¹ ⁶⁰² ⁶⁰³ ⁶⁰⁴ ⁶⁰⁵ ⁶⁰⁶ ⁶⁰⁷ ⁶⁰⁸ ⁶⁰⁹ ⁶¹⁰ ⁶¹¹ ⁶¹² ⁶¹³ ⁶¹⁴ ⁶¹⁵ ⁶¹⁶ ⁶¹⁷ ⁶¹⁸ ⁶¹⁹ ⁶²⁰ ⁶²¹ ⁶²² ⁶²³ ⁶²⁴ ⁶²⁵ ⁶²⁶ ⁶²⁷ ⁶²⁸ ⁶²⁹ ⁶³⁰ ⁶³¹ ⁶³² ⁶³³ ⁶³⁴ ⁶³⁵ ⁶³⁶ ⁶³⁷ ⁶³⁸ ⁶³⁹ ⁶⁴⁰ ⁶⁴¹ ⁶⁴² ⁶⁴³ ⁶⁴⁴ ⁶⁴⁵ ⁶⁴⁶ ⁶⁴⁷ ⁶⁴⁸ ⁶⁴⁹ ⁶⁵⁰ ⁶⁵¹ ⁶⁵² ⁶⁵³ ⁶⁵⁴ ⁶⁵⁵ ⁶⁵⁶ ⁶⁵⁷ ⁶⁵⁸ ⁶⁵⁹ ⁶⁶⁰ ⁶⁶¹ ⁶⁶² ⁶⁶³ ⁶⁶⁴ ⁶⁶⁵ ⁶⁶⁶ ⁶⁶⁷ ⁶⁶⁸ ⁶⁶⁹ ⁶⁷⁰ ⁶⁷¹ ⁶⁷² ⁶⁷³ ⁶⁷⁴ ⁶⁷⁵ ⁶⁷⁶ ⁶⁷⁷ ⁶⁷⁸ ⁶⁷⁹ ⁶⁸⁰ ⁶⁸¹ ⁶⁸² ⁶⁸³ ⁶⁸⁴ ⁶⁸⁵ ⁶⁸⁶ ⁶⁸⁷ ⁶⁸⁸ ⁶⁸⁹ ⁶⁹⁰ ⁶⁹¹ ⁶⁹² ⁶⁹³ ⁶⁹⁴ ⁶⁹⁵ ⁶⁹⁶ ⁶⁹⁷ ⁶⁹⁸ ⁶⁹⁹ ⁷⁰⁰ ⁷⁰¹ ⁷⁰² ⁷⁰³ ⁷⁰⁴ ⁷⁰⁵ ⁷⁰⁶ ⁷⁰⁷ ⁷⁰⁸ ⁷⁰⁹ ⁷¹⁰ ⁷¹¹ ⁷¹² ⁷¹³ ⁷¹⁴ ⁷¹⁵ ⁷¹⁶ ⁷¹⁷ ⁷¹⁸ ⁷¹⁹ ⁷²⁰ ⁷²¹ ⁷²² ⁷²³ ⁷²⁴ ⁷²⁵ ⁷²⁶ ⁷²⁷ ⁷²⁸ ⁷²⁹ ⁷³⁰ ⁷³¹ ⁷³² ⁷³³ ⁷³⁴ ⁷³⁵ ⁷³⁶ ⁷³⁷ ⁷³⁸ ⁷³⁹ ⁷⁴⁰ ⁷⁴¹ ⁷⁴² ⁷⁴³ ⁷⁴⁴ ⁷⁴⁵ ⁷⁴⁶ ⁷⁴⁷ ⁷⁴⁸ ⁷⁴⁹ ⁷⁵⁰ ⁷⁵¹ ⁷⁵² ⁷⁵³ ⁷⁵⁴ ⁷⁵⁵ ⁷⁵⁶ ⁷⁵⁷ ⁷⁵⁸ ⁷⁵⁹ ⁷⁶⁰ ⁷⁶¹ ⁷⁶² ⁷⁶³ ⁷⁶⁴ ⁷⁶⁵ ⁷⁶⁶ ⁷⁶⁷ ⁷⁶⁸ ⁷⁶⁹ ⁷⁷⁰ ⁷⁷¹ ⁷⁷² ⁷⁷³ ⁷⁷⁴ ⁷⁷⁵ ⁷⁷⁶ ⁷⁷⁷ ⁷⁷⁸ ⁷⁷⁹ ⁷⁸⁰ ⁷⁸¹ ⁷⁸² ⁷⁸³ ⁷⁸⁴ ⁷⁸⁵ ⁷⁸⁶ ⁷⁸⁷ ⁷⁸⁸ ⁷⁸⁹ ⁷⁹⁰ ⁷⁹¹ ⁷⁹² ⁷⁹³ ⁷⁹⁴ ⁷⁹⁵ ⁷⁹⁶ ⁷⁹⁷ ⁷⁹⁸ ⁷⁹⁹ ⁸⁰⁰ ⁸⁰¹ ⁸⁰² ⁸⁰³ ⁸⁰⁴ ⁸⁰⁵ ⁸⁰⁶ ⁸⁰⁷ ⁸⁰⁸ ⁸⁰⁹ ⁸¹⁰ ⁸¹¹ ⁸¹² ⁸¹³ ⁸¹⁴ ⁸¹⁵ ⁸¹⁶ ⁸¹⁷ ⁸¹⁸ ⁸¹⁹ ⁸²⁰ ⁸²¹ ⁸²² ⁸²³ ⁸²⁴ ⁸²⁵ ⁸²⁶ ⁸²⁷ ⁸²⁸ ⁸²⁹ ⁸³⁰ ⁸³¹ ⁸³² ⁸³³ ⁸³⁴ ⁸³⁵ ⁸³⁶ ⁸³⁷ ⁸³⁸ ⁸³⁹ ⁸⁴⁰ ⁸⁴¹ ⁸⁴² ⁸⁴³ ⁸⁴⁴ ⁸⁴⁵ ⁸⁴⁶ ⁸⁴⁷ ⁸⁴⁸ ⁸⁴⁹ ⁸⁵⁰ ⁸⁵¹ ⁸⁵² ⁸⁵³ ⁸⁵⁴ ⁸⁵⁵ ⁸⁵⁶ ⁸⁵⁷ ⁸⁵⁸ ⁸⁵⁹ ⁸⁶⁰ ⁸⁶¹ ⁸⁶² ⁸⁶³ ⁸⁶⁴ ⁸⁶⁵ ⁸⁶⁶ ⁸⁶⁷ ⁸⁶⁸ ⁸⁶⁹ ⁸⁷⁰ ⁸⁷¹ ⁸⁷² ⁸⁷³ ⁸⁷⁴ ⁸⁷⁵ ⁸⁷⁶ ⁸⁷⁷ ⁸⁷⁸ ⁸⁷⁹ ⁸⁸⁰ ⁸⁸¹ ⁸⁸² ⁸⁸³ ⁸⁸⁴ ⁸⁸⁵ ⁸⁸⁶ ⁸⁸⁷ ⁸⁸⁸ ⁸⁸⁹ ⁸⁹⁰ ⁸⁹¹ ⁸⁹² ⁸⁹³ ⁸⁹⁴ ⁸⁹⁵ ⁸⁹⁶ ⁸⁹⁷ ⁸⁹⁸ ⁸⁹⁹ ⁹⁰⁰ ⁹⁰¹ ⁹⁰² ⁹⁰³ ⁹⁰⁴ ⁹⁰⁵ ⁹⁰⁶ ⁹⁰⁷ ⁹⁰⁸ ⁹⁰⁹ ⁹¹⁰ ⁹¹¹ ⁹¹² ⁹¹³ ⁹¹⁴ ⁹¹⁵ ⁹¹⁶ ⁹¹⁷ ⁹¹⁸ ⁹¹⁹ ⁹²⁰ ⁹²¹ ⁹²² ⁹²³ ⁹²⁴ ⁹²⁵ ⁹²⁶ ⁹²⁷ ⁹²⁸ ⁹²⁹ ⁹³⁰ ⁹³¹ ⁹³² ⁹³³ ⁹³⁴ ⁹³⁵ ⁹³⁶ ⁹³⁷ ⁹³⁸ ⁹³⁹ ⁹⁴⁰ ⁹⁴¹ ⁹⁴² ⁹⁴³ ⁹⁴⁴ ⁹⁴⁵ ⁹⁴⁶ ⁹⁴⁷ ⁹⁴⁸ ⁹⁴⁹ ⁹⁵⁰ ⁹⁵¹ ⁹⁵² ⁹⁵³ ⁹⁵⁴ ⁹⁵⁵ ⁹⁵⁶ ⁹⁵⁷ ⁹⁵⁸ ⁹⁵⁹ ⁹⁶⁰ ⁹⁶¹ ⁹⁶² ⁹⁶³ ⁹⁶⁴ ⁹⁶⁵ ⁹⁶⁶ ⁹⁶⁷ ⁹⁶⁸ ⁹⁶⁹ ⁹⁷⁰ ⁹⁷¹ ⁹⁷² ⁹⁷³ ⁹⁷⁴ ⁹⁷⁵ ⁹⁷⁶ ⁹⁷⁷ ⁹⁷⁸ ⁹⁷⁹ ⁹⁸⁰ ⁹⁸¹ ⁹⁸² ⁹⁸³ ⁹⁸⁴ ⁹⁸⁵ ⁹⁸⁶ ⁹⁸⁷ ⁹⁸⁸ ⁹⁸⁹ ⁹⁹⁰ ⁹⁹¹ ⁹⁹² ⁹⁹³ ⁹⁹⁴ ⁹⁹⁵ ⁹⁹⁶ ⁹⁹⁷ ⁹⁹⁸ ⁹⁹⁹ ¹⁰⁰⁰ ¹⁰⁰¹ ¹⁰⁰² ¹⁰⁰³ ¹⁰⁰⁴ ¹⁰⁰⁵ ¹⁰⁰⁶ ¹⁰⁰⁷ ¹⁰⁰⁸ ¹⁰⁰⁹ ¹⁰¹⁰ ¹⁰¹¹ ¹⁰¹² ¹⁰¹³ ¹⁰¹⁴ ¹⁰¹⁵ ¹⁰¹⁶ ¹⁰¹⁷ ¹⁰¹⁸ ¹⁰¹⁹ ¹⁰²⁰ ¹⁰²¹ ¹⁰²² ¹⁰²³ ¹⁰²⁴ ¹⁰²⁵ ¹⁰²⁶ ¹⁰²⁷ ¹⁰²⁸ ¹⁰²⁹ ¹⁰³⁰ ¹⁰³¹ ¹⁰³² ¹⁰³³ ¹⁰³⁴ ¹⁰³⁵ ¹⁰³⁶ ¹⁰³⁷ ¹⁰³⁸ ¹⁰³⁹ ¹⁰⁴⁰ ¹⁰⁴¹ ¹⁰⁴² ¹⁰⁴³ ¹⁰⁴⁴ ¹⁰⁴⁵ ¹⁰⁴⁶ ¹⁰⁴⁷ ¹⁰⁴⁸ ¹⁰⁴⁹ ¹⁰⁵⁰ ¹⁰⁵¹ ¹⁰⁵² ¹⁰⁵³ ¹⁰⁵⁴ ¹⁰⁵⁵ ¹⁰⁵⁶ ¹⁰⁵⁷ ¹⁰⁵⁸ ¹⁰⁵⁹ ¹⁰⁶⁰ ¹⁰⁶¹ ¹⁰⁶² ¹⁰⁶³ ¹⁰⁶⁴ ¹⁰⁶⁵ ¹⁰⁶⁶ ¹⁰⁶⁷ ¹⁰⁶⁸ ¹⁰⁶⁹ ¹⁰⁷⁰ ¹⁰⁷¹ ¹⁰⁷² ¹⁰⁷³ ¹⁰⁷⁴ ¹⁰⁷⁵ ¹⁰⁷⁶ ¹⁰⁷⁷ ¹⁰⁷⁸ ¹⁰⁷⁹ ¹⁰⁸⁰ ¹⁰⁸¹ ¹⁰⁸² ¹⁰⁸³ ¹⁰⁸⁴ ¹⁰⁸⁵ ¹⁰⁸⁶ ¹⁰⁸⁷ ¹⁰⁸⁸ ¹⁰⁸⁹ ¹⁰⁹⁰ ¹⁰⁹¹ ¹⁰⁹² ¹⁰⁹³ ¹⁰⁹⁴ ¹⁰⁹⁵ ¹⁰⁹⁶ ¹⁰⁹⁷ ¹⁰⁹⁸ ¹⁰⁹⁹ ¹¹⁰⁰ ¹¹⁰¹ ¹¹⁰² ¹¹⁰³ ¹¹⁰⁴ ¹¹⁰⁵ ¹¹⁰⁶ ¹¹⁰⁷ ¹¹⁰⁸ ¹¹⁰⁹ ¹¹¹⁰ ¹¹¹¹ ¹¹¹² ¹¹¹³ ¹¹¹⁴ ¹¹¹⁵ ¹¹¹⁶ ¹¹¹⁷ ¹¹¹⁸ ¹¹¹⁹ ¹¹²⁰ ¹¹²¹ ¹¹²² ¹¹²³ ¹¹²⁴ ¹¹²⁵ ¹¹²⁶ ¹¹²⁷ ¹¹²⁸ ¹¹²⁹ ¹¹³⁰ ¹¹³¹ ¹¹³² ¹¹³³ ¹¹³⁴ ¹¹³⁵ ¹¹³⁶ ¹¹³⁷ ¹¹³⁸ ¹¹³⁹ ¹¹⁴⁰ ¹¹⁴¹ ¹¹⁴² ¹¹⁴³ ¹¹⁴⁴ ¹¹⁴⁵ ¹¹⁴⁶ ¹¹⁴⁷ ¹¹⁴⁸ ¹¹⁴⁹ ¹¹⁵⁰ ¹¹⁵¹ ¹¹⁵² ¹¹⁵³ ¹¹⁵⁴ ¹¹⁵⁵ ¹¹⁵⁶ ¹¹⁵⁷ ¹¹⁵⁸ ¹¹⁵⁹ ¹¹⁶⁰ ¹¹⁶¹ ¹¹⁶² ¹¹⁶³ ¹¹⁶⁴ ¹¹⁶⁵ ¹¹⁶⁶ ¹¹⁶⁷ ¹¹⁶⁸ ¹¹⁶⁹ ¹¹⁷⁰ ¹¹⁷¹ ¹¹⁷² ¹¹⁷³ ¹¹⁷⁴ ¹¹⁷⁵ ¹¹⁷⁶ ¹¹⁷⁷ ¹¹⁷⁸ ¹¹⁷⁹ ¹¹⁸⁰ ¹¹⁸¹ ¹¹⁸² ¹¹⁸³ ¹¹⁸⁴ ¹¹⁸⁵ ¹¹⁸⁶ ¹¹⁸⁷ ¹¹⁸⁸ ¹¹⁸⁹ ¹¹⁹⁰ ¹¹⁹¹ ¹¹⁹² ¹¹⁹³ ¹¹⁹⁴ ¹¹⁹⁵ ¹¹⁹⁶ ¹¹⁹⁷ ¹¹⁹⁸ ¹¹⁹⁹ ¹²⁰⁰ ¹²⁰¹ ¹²⁰² ¹²⁰³ ¹²⁰⁴ ¹²⁰⁵ ¹²⁰⁶ ¹²⁰⁷ ¹²⁰⁸ ¹²⁰⁹ ¹²¹⁰ ¹²¹¹ ¹²¹² ¹²¹³ ¹²¹⁴ ¹²¹⁵ ¹²¹⁶ ¹²¹⁷ ¹²¹⁸ ¹²¹⁹ ¹²²⁰ ¹²²¹ ¹²²² ¹²²³ ¹²²⁴ ¹²²⁵ ¹²²⁶ ¹²²⁷ ¹²²⁸ ¹²²⁹ ¹²³⁰ ¹²³¹ ¹²³² ¹²³³ ¹²³⁴ ¹²³⁵ ¹²³⁶ ¹²³⁷ ¹²³⁸ ¹²³⁹ ¹²⁴⁰ ¹²⁴¹ ¹²⁴² ¹²⁴³ ¹²⁴⁴ ¹²⁴⁵ ¹²⁴⁶ ¹²⁴⁷